

## 郷愁のブルガリア

### 於保洋生(S35)



約47年前、私は、黒海の近くのブルガリアに駐在していた。T社(かつて、磁気テープで世界を制覇した会社、当時は約売上8百億円、今は約1兆2千億円)で、引合いから約一年近くで、商社抜きで、ラジオ、テレビ用電子部品フェライトのプラント輸出をチームで決めて、海外事業部の中で、若き私が駐在員になったのである。役目は、事務担当兼通訳で、それは、私が東京外語大ロシア科のOBで、ブルガリア語が同じスラブ系言語で、ロシア語に近いという理由

であった。言語的に近いと言っても、此方のしゃべるロシア語をブルガリア人は容易く理解できるのだが(例えば、「こんにちは」はロシア語で「ドブルイ ジェーニ」だがブルガリア語では「ドバル デン」とスペルで見るとかなり似ている)、先方のしゃべるロシア語は、訛っていて理解が難しい状態であった。それは、例えば、鹿児島弁か秋田弁でしゃべられても、標準語しか分からない人は、理解に苦しむと言う状態と同じであった。兎に角苦労した。尚、技術指導のやり取りは、英語をメインとして、契約やノウハウドキュメントも英語がメインであった。

ペルニクの工場建設は、ブルガリアサイドの責任で、日本の工場と比べるとかなりでっかい建屋を建築していたが、完成が予定より大幅に遅れてしまい駐在していたエンジニアも10月に一時引き上げをしなければならなくなった。

ブルガリアは当時、社会主義国で、工業水準はかなり遅れていたが、駐在中、接した人々はとても親切で、国際交流はとても上手くいっていたと信じている。

後ろ髪を引かれる思いで、サブコンエンジニアの日本への一時帰国のアテンドで、私もスイス経由で、日本に帰国したのであるが、ブルガリアを去る時、「ブルガリアは第二の祖国の様なもので、又、戻って来たい、又、ブルガリアの地を踏みしめたい」と心に思い、先方の通訳にも言った事を覚えている。

結果として、日本帰国後、T社の都合で、ブルガリアに戻ることは無く、その後、「いつかはブルガリアを再訪したい」と念じていた。

先日、テレビで、ソフィアの映像を見て、懐かしい気持ちになった。昔、歩き廻ったあの

路地や電車や教会や街並みをもう一度見てみたいと心から思った。

昔、会った人たちとはもう会えないかもしれないが、出来る事なら、再訪して、じっくりと思い出に耽ってみたい（然し、今再訪しても懐かしい現地の人達は今はもういないかもしれない）。

T社では、このプラント輸出で、チームとして社長賞をもらい、社内で、ブルガリアプラント会を2年置き位に開催して、懐かしさ交流をしているが、出来れば、現地の方々の消息等も知りたいものと思っているがままならぬ。通商代表部でいろいろと交流した、B氏（のちに駐日大使になった。駐在前の、私の結婚式披露宴にも出て頂いた）にも会ってみたい。少なくともメール交換などしてみたい思いで一杯だ。

当時、ブルガリアは社会主義国で、日本とは社会体制が異なっていたが、ソ連東欧諸国からも電子部品のプラント輸出の引き合いが多く来ていた中で、ブルガリアと（当時は商社経由がほとんどだったが、商社抜きで）成約したのである。T社のブルガリアプラントの場合、世界の文化、産業に貢献すると言う社是の下、トップ経営陣の英断の下、輸出をしたのである。

当時、日本企業では、ベアリングの日本精工の今里広記氏が東欧諸国に、又、京セラがソ連にプラント輸出していた事を覚えている。

T社の場合、述べ約20人のエンジニア、そして、ドイツを含むサブコン社員がソフィアから南に30キロ離れたペルニク市で、技術指導を行った。これは、大いにドイツ人を含めて、日独武国間の国際交流に貢献したことは明らかである。

当時のブルガリアの人口は、約900万台で、いずれ、1000万人台にのるかどうか、上司と話しあった事を覚えている。

その後、トルコ問題や社会体制の変換などで、人口は大きく減少して2015年で715万人となっている。尚、面積は日本の約3分の一である。

トルコの北東、ギリシャの北、黒海の西に面している。

先発隊は、ゴールノバーニャと言う山間のリゾートホテル（ブルガリア人は、夏、海だけではなく、山の中でも裸になって日光浴をするのにはびっくりした。又、医療温泉には海水パンツで入る人に驚いた）に宿泊して、毎日、ペルニク市の工場敷地迄運転手付き車で移動した。

後に、ペルニク市のビジネスホテルが完成するとそちらに移ったが、最初は窓が上手く閉まらなかったり、シャワーが出なかったり、大変な思いをした。

ソフィアには、輸入公団やいろいろな手続きの為に、しょっちゅう、出かけたが、日本との文通手段であるテレックスの受け取りや送信の為に、初期に依頼していた商社K社訪問も街中を見られるので、或る意味で楽しみであった。

ソフィア市は、ビトシャ山のふもとに位置する人口149万人、標高550メートルの高原都市でブルガリアの州都である。南のビトシャ山などの周囲を山々に囲まれた盆地で、水が美味しい。

市内には、アレクサンドルネフスキー寺院（5000人収容のブルガリア最大の寺院で、私も、ドイツに行く際に立ち寄った家内も昔署名してある）や聖ネデーリャ教会（私達は、「猫柳教会」と呼んでいた）や聖ペトカ地下協会等があり、又、デパート「ツム」も有った。又、ソ連式の「文化と休息の公園」の緑が小さいながらも目を楽しませてくれた事を覚えている。

当時は、地下鉄が無く、路面電車が走りまわっていた事を覚えている。契約で、運転手付きの車が利用できたので、或る意味では移動が楽であった。

ソフィア以外では、夏に行った、黒海沿岸のヴァルナ（ブルガリア第3の都市、人口34万人、ゴールデンサンズで有名）や前年出張時に訪れたブルガス（8kmのサニービーチ等で有名）が西洋風の街並みと海岸沿いの高層ホテル群に或る意味では日本の海岸リゾート以上だとビックリした事を覚えている。ヴァルナは、欧州から夏は観光客が集中して人口が100万人に膨れ上がると言われていた。

ソフィア南方のブルガリア正教の総本山リラの僧院もサイズの的にも素晴らしかった。イタリア訪問の後、立ち寄られたT社会長ご夫妻にもご見学を御勧めした程である。約500年に渡るトルコの支配下の中で、ここだけはキリスト教の信仰やブルガリア語の本を読むことも黙認されたと言う。

1983年、世界遺産に登録された。（約500年の圧政から解放してくれたソ連をブルガリアが崇拝していたのも良く分かるし、リラの僧院がその間、ブルガリア文化を守る砦となっていたのである。）

その後、T社で、アメリカや大連等に出張し、更に定年後、上海とソウルをそれぞれ、50回も訪問したが、青春時代の多感な時期のブルガリア経験が今から考えると一番懐かしい気持ちがする。